博物館学雑誌　第36巻　第2号（通巻54号）137～140ページ 2011年4月

【書評】

落合知子著『野外博物館の研究』

野中　優子

Yuko NONAKA

はじめに

本書は野外博物館の歴史、分類、今後の可能性などを幅広く扱った、野外博物館に関する初めての本格的な研究書である。著者は「博物館学は机上の学問ではない」という理念を貫き、現地調査に重きを置いてきた。また、著者の野外博物館論は師である青木豊の博物館学、とりわけ地域博物館論を土台に野外博物館の理論を形成している。このように野外博物館の研究を長年行なってきた著者が膨大な現地調査、資料渉猟の上で著した野外博物館論は、野外博物館についての理解を深めるだけでなく、博物館学についても広く考える事が出来るものになっている。

野外博物館は展示分類上、展示を屋内で行なう博物館に対し、野外を展示・教育諸活動の場とする博物館の形態である。我が国では屋内に展示施設を持つ博物館が一般的であり、それに比べ野外博物館の認識は希薄ではあるが、それでも戦前は野外博物館の理論的な研究は行われていた。

しかし、戦後からその研究は下火となり、1986年以降はフランスのアンリ・リヴィエールによるエコミュージアムの考え方が導入されたことにより、野外博物館の研究はエコミュージアム理論に吸収され、感化するに至った。その間のエコミュージアム理論は、本来の理論を大きく逸脱し、新井重三の理論は所謂エコミュージアムの和風化論であった。その結果、エコミュージアムの概念や野外博物館との関連性などについて深く研究されることなく、さらに1988年からの“ふるさと創生事業”もあいまって、エコミュージアムの理念は不明瞭となり確立されなかったのである。また、1994年から実施された天然記念物整備活用事業の一環にエコミュージアム事業が制定されたことで、我が国のエコミュージアムは生態系・自然環境重視の概念が根付いたといえるだろう。このようなことから、著者はエコミュージアムを野外博物館の分類から外し、独自の野外博物館の概念の明確化を図っている点が本書の最大の特徴である。

本書の内容

本書の内容は、先ず博物館学意識を有する学者による野外博物館の先行研究史を詳らかにし、

※ 國學院大學博物館学研究室

原稿受理日：平成22年12月7日

次に野外博物館成立の歴史を北欧と日本とで比較検討している。これらの歴史をまとめた上で、野外博物館の先行研究による分類を見直し、現代社会に添った新たな野外博物館の分類を試みている。この分類をもとに現地調査で具体例を提示し、野外博物館の有効性や可能性について論じている。

本書は序章と終章の他、6章で構成されている。

序章　博物館学意識の黎明
1章　野外博物館研究史
2章　野外博物館の歴史
3章　野外博物館の概念と分類
4章　道の駅野外博物館・エコミュージアム・重要伝統的建造物群
5章　完成された韓国の野外博物館と日本の重要伝統的建造物群
6章　野外博物館の必要条件
終章

先ず、1章では野外博物館研究史として南方熊楠や黒板勝美、棚橋源太郎など実に多くの人物の野外博物館についての先行研究を論証している。この中で南方熊楠が明治45年に白井光太郎に宛てた書簡の中で「野外博物館」という語を初めて使用したこと、学史研究を行なう中で明治44年に黒板勝美が「博物館学」という語を初めて使用したこと、棚橋源太郎がスカンセンの考察で複製展示が存在していることを看破していたことなど、博物館学としても重要な発見がされており、非常に興味深い。野外博物館の研究史を通して、明治期の博物館学研究者が現代でも通用する論を展開していたことに大変驚き、学史研究の重要性を再認識することができる。

2章では野外博物館成立の歴史を南方の論に従い、生活と信仰、地域社会に根付いた社叢に焦点をあて、考察し、日本における野外博物館の萌芽を確認した上で、野外博物館を日本の事例と北欧の事例から論述している。日本は勿論のこと、人文系野外博物館発祥の地である北欧を訪れ、現地調査を踏んで論じた北欧の野外博物館史は説得力がある。特に世界最古の野外博物館を建設したアートゥル・ハセリウスの複製展示の理念、野外ならではの非日常の体験による教育的効果などは、現地調査を行なったからこそ記述できるものであろう。

3章では野外博物館の概念と分類を試みているが、この分類が本書のもっとも重要な部分と考える。これまで野外博物館の分類は新井重三の現地保存型と収集展示型の2形態が一般的に使用されてきたが、この新井の分類を見直し、遺跡、社叢、植物群落、重要伝統的建造物群、景観地、世界遺産、近代遺産等を含めて野外博物館と捉え、現地保存型と移設・収集型、更に、復元・建設型の3形態からなる分類を確立させた。この分類をもとに各地の博物館や遺跡を詳細に検討し、分類に即した解説がなされている。著者の分類が現代社会に即していることが理解出来る。

更に、著者は野外博物館の必須条件とは、環境景観などに重きを置き、人間の生活が関わった、所謂、風土を移設、再現したものであること、また、それは自然系と人文系の両者を併せ持つ総

合博物館であり、その野外に於ける風土の展示を集約した核となる博物館を有していることを挙げている。つまり、野外博物館はその地域の風土を形成する基盤要素である植物を展示に取り入れることが可能であるなど、他の博物館にはない特性を論じているのである。

4章では3章で行なった分類を踏まえ、更に具体例をあげて実際の野外博物館を検証し、野外博物館の理想的な姿を提言している。特筆すべきは1節の道の駅の研究である。道の駅は一般道における駅という発想に基づいて建設された、休憩のための駐車場、地域の特産品の販売、歴史や文化の紹介など情報交換の場である。道の駅は立ち寄った利用者が道路情報や、特産品のみならず、周辺地域の文化や歴史、風土、自然など多くの情報を得ることが出来る優れた施設といえる。これまで博物館学として道の駅を研究の対象にすることは皆無であったが、青木豊が郷土博物館としての重要性を説き、道の駅博物館の研究に先鞭を付けたが、未だ未開発の分野といえるのである。道の駅博物館は遺跡の付近にある事例や、展示施設を持つ事例など非常に幅広い形態を持ち、著者はこれらを事例の紹介と共に野外博物館の概念に照らし合わせて論述している。風土、歴史、文化を紹介する当該地域の縮図ともいえる道の駅は、著者の野外博物館の概念に一致するものであり、野外博物館として道の駅博物館論を展開した点は評価されるであろう。この新たな分野といえる道の駅博物館の論述は充実しており、博物館学と道の駅の関係についての論に初めて触れる読者にも理解しやすい内容になっている。

5章は韓国の野外博物館を移設・収集型と現地保存型に分けて論考し、それを踏まえ、日本の重要伝統的建造物群との比較研究を行っている。一般的に野外博物館といえば、北欧を中心に論じられることが多い中で、著者はあえてアジアの野外博物館に焦点を当て、その優れた点を見出した鋭い観察力は特筆すべきである。韓国の野外博物館を完成された野外博物館とした著者の論を取り込めば、日本の野外博物館のさらなる活性化が図れるものと考えられるのである。

6章では野外博物館の必要条件として、動態（感）展示、映像展示など具体的な展示方法を示し、野外博物館ならではの体験型の教育活動について論じている。また、野外博物館の必要条件として動物飼育、コスチュームスタッフ、植栽を挙げ、その中でも特に植栽を強調している点にも注目したい。野外博物館の最大の魅力は野外ならではの臨場感であり、野外の展示空間に違和感なく入り込めるように工夫がされなければならない。いかに野外における展示物が素晴らしく、コスチュームスタッフや動物が展示の世界観を作ろうと努力しても、景観の基礎要素である植栽がその地域に根差したものでなければ、利用者は違和感を覚え、展示の世界に入り込むことは困難となるだろう。植栽がいかに重要な条件であるかを論じた点も特色ある野外博物館論となっている。

また、動物、コスチュームスタッフ、植栽などを駆使しても、遺跡など現実には再現するのが困難なものも少なくない。その場合の映像の可能性が論じられているが、野外博物館という特性からか映像による展示がいまだ十分ではないと著者は指摘している。今後の展開を期待したい。

野外博物館の可能性

著者は本書を通じて、野外博物館の歴史、あり方、可能性を述べてきた。そして新井重三の分類の見直しを図った結果、新たに復元・建設型を分類基準に設定し、より明確な野外博物館の把握を可能としたのである。また、北欧の移設・収集型を主とする野外博物館を範とした川崎市立日本民家園や、日本民家集落博物館等だけを対象とするのではなく、風土記の丘、遺跡、植物群落、重要伝統的建造物群はもとより、景観地、世界遺産、近代化遺産等をも含めて野外博物館として捉え、野外に存在する多くの事象が野外博物館に成り得ることを提案している。時間の経過に伴い、あらゆる種類の文化財が増加の一途を辿り、今後も増え続けることから、これら新規の文化財を保護し、活用するには野外博物館化するのが得策であるとし、当然そこには核となる博物館の建設と学芸員の配置が必要であると論じている。この理念は、単に野外博物館だけの研究分野で止まるものではなく、地域文化資源論、郷土論など限りない分野の研究に繋がっていくテーマといえるだろう。

著者はこれからの野外博物館に望まれる姿として完成された郷土博物館を挙げ、「野外博物館とは郷土の縮図である」とする概念を主張し、野外博物館は郷土地域博物館の新しい形態として位置付けられると論じている。この理念は大変納得できるものであるが、郷土博物館としての野外博物館についての論考が少々少なく感じた。この点も今後の研究に期待したい。

巻末には野外博物館に関する文献目録がまとめられ、野外博物館についての著書が一覧でき、野外博物館や博物館学を学ぶ者には大変役立つ内容になっている。

本書は野外博物館のみならず、博物館学を学ぶ上でも優れた著書であり、博物館と地域について、野外博物館を通してこれからの地域文化資源の保存と活用を考えていく上で大きな役割を果たせるものであるだろう。

(2009年9月発行　雄山閣)